

争論 さらなるごみの減量化にむけて

地域活動が支える ごみの減量・リサイクル

高田 艶子

京都市北区・元町ごみ減量推進会議会長

聞き手：岩橋 涼（京都大学大学院農学研究科博士後期課程）



元町ごみ減量推進会議とは

【岩橋】 高田さんは、元町学区のごみ減量推進会議の会長として活動されていますが、ごみ減量推進会議とはどのような組織でしょうか。

【高田】 京都市ごみ減量推進会議¹⁾は、1996年に行政からの要請のようなかたちで発足しました。元町については、2000年に京都市から、市内の自治連合会的な組織に対して「使用済み天ぷら油の回収をしたいので、その受け皿となる組織をつくってくれ」という要請があったことが設立のきっかけです。元町の場合は、自治連合会はなく、元町社会福祉協議会が自治連合会の役割を兼ねることになっています。「天ぷら油の回収とか環境というのは、女性会だろう」ということで、当時、たまたま私が女性会の会長をしていたので、「あんなところでやらないか」という感じで話が来しました。それで、「いま女性会は仕事がいっぱいだから、うちだけではできません」という話をしたら、「じゃ、環境に関わる団体が集まって、やってみようか」ということになり、社会福祉協議会（社協）と女性会と保健協議会の3団体、それに子ども達もかかわってということで小学校PTAが集まって、元町ごみ減量推進会議という受け皿をつくって、廃油の回収を始めたのです。

最初は廃油の回収だけでしたが現在では回収品目も増え、活動もコミュニティ回収²⁾・地域大掃除・エコ学区活動等、文字通りごみ減量のため地域で活動する組織となっています。

家庭ごみ有料指定袋制について

【岩橋】 京都市では、2006年からごみの有料指定袋制が導入されました。それまでの地域のごみ出しは、どのようにされていたのですか。

【高田】 ごみ袋の有料化は2006年ですが、それまでの京都市のごみ行政は「高機能の焼却場を持っているから、何でもごちゃ混ぜに集めて、全部燃やします」というやり方でした。すでに名古屋や九州等では細かい分別をしていて、環境問題に関わる者の間では「京都市はいつまでもそんなことをやっていて、どうするのか」という話もしていました。

【岩橋】 ごみ袋の有料化は市民の生活にも大きな変化をもたらすものであったと思います。市民への説明会はどのようにおこなわれたのでしょうか。また、反応はいかがでしたか。

【高田】 市内全域で地域向けの説明会や各種団体向けの説明会が開かれました。元町学区でも、行政と元町ごみ減量推進会議の共催で、小学校で3度くらい説明会を開いたと思います。

市民の反応については、やはり反対意見も多かったですね。「袋が高い、1カ月300円以上の負担増だ、不法投棄が増える」等、地域でも声高に反対を唱える方もおりました。でも、ごみはどんどん増え続けるし、さらに全量をごちゃ混ぜに燃やすことは時流に合わないし、有料化後は分別をちゃんとやるという話だったので、地域では「そういう転換期のなかでやることはいいんじゃないの」という意見が大勢でしたね。

【岩橋】 導入後、どのような変化がありましたか。

【高田】 ごみが劇的に減りました。だから、「よそは苦勞して先行事例をつくったのに、京都市は後出しジャンケンですごい効果をあげた」と、言われたりしました。いま京都市は、20の政令都市のなかで、家庭ごみの量がいちばん少ないです。その意味では、京都市の施策がとても効果的に進むきっかけになったと思います。

【岩橋】 ごみの有料指定袋制については、時間の経過に伴って、ごみの減量効果が弱まるという話もあります。

【高田】 そうですね。「市のごみ受け入れ量の推移とクリーンセンターの処理能力」という資料によると、2006年以降、徐々に浸透するとともにピーク時の3分の2か4分の3ぐらいに下がっていましたが、近年はその下がり方が少し鈍ってきました。それで、今年、「しまつのこころ条例」

というかたちで、再度の注意喚起と、「すべてのごみを家庭ごみの袋に入れないで、ちゃんと分別して家庭ごみを減らしましょう」という呼びかけをしたわけです。

【岩橋】 有料指定袋制を導入しても、分別がきちんとおこなわれていなかったということでしょうか。

【高田】 それはありますね。私はいま、京都市廃棄物減量等推進審議会の委員として、「しまつのこころ条例」にも関わっていますが、特に学生など、ひとり暮らしの場合、生ごみや雑がみをいくつもの袋に分けて入れるのは大変だから1週間に1回ぐらいなら1つの袋に全部入れようかという方もけっこういらっしゃいます。そういうことで、分別が思ったより進んでいない状況があります。

たとえば、最近では新聞をとっていない人も多いと聞きますが、新聞やダイレクトメールは雑がみ、コンビニで買ってきたお弁当の容器はプラスチック容器・包材の袋、また、飲料の缶やペットボトルは別の袋に分別しなければなりません。しかし、1週間に少しのごみだったら20リットルの袋に全部入れようか…となるのもわかります。プラスチック容器・包材の場合は、きちんと洗って、乾かして入れることになっているので、その手間も少し負担になっているでしょうね。

これは必ずしも学生が悪いわけではありません。「大学のまち・京都」ですから学生さんもたくさんいらっしゃいますが、京都に来られた段階で、京都市のごみの分別の仕方をきちんとお知らせしているのかという問題もあります。また高齢者の方も細かく分けるのがしんどいかもしれません。ですから、今回はきっちり徹底させようと

いうことで、大学や単身者用のマンション・地域の方々にも丁寧に説明しています。

「しまつのころ条例」に対する市民の反応

【岩橋】 今年10月からは「しまつのころ条例」が始まりました。地域では説明会も開催されたようですが、市民の反応はいかがでしょうか。

【高田】 地域の方は、条例ができたことくらいは知っていますが、その中身まではよく理解できていないという状況です。ごみの出し方が厳しくなったのは事業系のほうで、事業系のごみは罰則規定を含む厳しい規定がありますが、市民に対しては「ごみが増えているから、雑がみなどは分別して、ごみを減らそうね。食品ロスにも気をつけて、またリサイクルだけではごみは減らないから2R³⁾も頑張るね」というメッセージです。

元町は、コミュニティ回収で雑がみなどの回収もやってきたので、条例については「いいことよね」という受けとめですね。

【岩橋】 今回の条例では、雑がみが新たに分別項目に追加されました。

【高田】 ごみ袋有料化を行い、分別もしたけれども、ごみ減量の動きが鈍ってきたので、家庭ごみから何を除いたらもっと削減できるのかということをお話したら、「結局、紙類だ」となりました。コミュニティ回収そのものは、早い地域では7～8年前からされていたと聞いていますが、「必ず雑がみを集めてね」と言いだしたのは3年ほど前だと思います。

やはり意識的に雑がみを減らすと、家庭ごみは劇的に減りますね。雑がみをきちんと分別すると家庭ごみの袋のサイズが1つ小さくなります。それは実感としてあるので、それをみんなが実践すれば効果大だと思います。

ただ、有料化のときは「この袋1枚に20円とか30円とか出さなければいけない」というのは、それまで経験したことがなかったもので、「これはちょっと一度に詰めようか」とか「これは分別して出そうか」という感じでしたが、7～8年経ってしまうとなんとなく慣れて、違和感なく一緒に出すようになっていきます。だから、ちゃんとシステムをつくって、「もっと減らそうね」という話になると、みんなも出し方を意識するようになって、けっこう減りますね。

【岩橋】 「しまつのころ条例」は、開封調査に関してプライバシーの問題が新聞などで取り上げられました。その点に関して、地域の方々はどのような反応でしたか。

【高田】 夏頃に新聞でも開封調査のことが報道されて、地域でも「開封調査があるんだよ」というような話もありました。審議会でも、それについてはいろいろ議論がありました。が、「とりあえずルールを守って、現状の出し方をしていれば、問題ありません。ただ、ルールを守らないで、ごちゃ混ぜに出したりする人もある。そういう人については、シールで何回も警告して、最終手段として開封調査をさせていただきます」ということです。

一般論としては「それってプライバシーに関わることじゃないの」と言いつつ、「ちゃんと出していれば、うちは関係ないよ」というのはありますね。大多数の方はルールを守っているけれども、そうじゃな

い方もあるし、そういう方に向けた「もう少しごみを減量したいんです」というアピールのひとつだというのが実体で、その辺をちゃんと説明しているの、地域の方々には「ああ、そうなんだ」という感じですね。

分別のやり方が突然変わったとか、さらにみんなに開封調査がある、ということではないし、地域の方々にしてみると、「たしかにルールを守らない人って、いるよね」とか「単身者用マンションから、いろいろ入った袋が出てくるよね」と思ったりしているし、実際に、ごみを出す日ではないのに出ていたり、びん・缶・ペットボトルの日なのに缶も容器・包材もごちゃ混ぜに出されていて回収車が持っていけないとか、そういうことを目の当たりにしているの、「そういうルールがきちり守られるようなシステムを考えているんです」と説明すると、いつも普通にごみ出ししている人はあまり緊迫感がありませんね。

コミュニティ回収の実践

【岩橋】 元町のコミュニティ回収はどのように進めていますか。

【高田】 元町に関していえば、ごみ減量推進会議は環境に関わる団体で構成しているので、コミュニティ回収は、ごみ減量推進会議が学区全体で取り組むかたちになっています。毎月第2土曜日は「元町エコの日」というふう決めて、使用済み天ぷら油・蛍光管・乾電池は元町会館（自治会館）の前で集めて、新聞・雑誌・段ボール・雑がみ・古着については京都市の資源物回収拠点にそれぞれが持ってきてもらう形になっています。

【岩橋】 元町の廃油の回収やコミュニティ回収等には、どれぐらいの人が参加していますか。

【高田】 回収拠点は24あるので、かかわる団体の役員とかボランティアは50人位になるでしょうか。でも参加ということになれば学区全体に呼びかけていますから1400軒から参加していると思いたいですね。

廃油の回収にしても、他の学区に聞くと「元町さんは小さな学区なのにたくさん集めてらっしゃいますよ」と言われるし、蛍光管もそれなりにコンスタントに集まりますし、コミュニティ回収もこれで2年になりますが、最初よりは啓発が行き届いて、回収量が約2倍になりました。それはそれでうれしいのですが、基本のごみ減量推進会議が地域でやる仕事は「いまはこういう状況なのよ。だから、そういうことに気をつけて、地域のくらしのところで頑張って実践してね」と伝えることだと思うので、量はあまり気にしていません。

たとえば「京都市家庭ごみ減量の主な取り組み」には、エコまちステーション4)が云々とか、生ごみ3キリ運動5)開始とか、雑がみ分別実験の開始とか、有害危険ごみ等の移動式拠点回収を本格実施とか書かれていて、その都度リーフレットや「市民しんぶん」にいろいろ出たりしますが、ほとんどの人は知らないというか、「そんなこと、あったっけ」という感じなので、地域で身近にかみくだいて「こうなのよ」とお伝えすることが大事なと思います。

【岩橋】 地域の方々への啓発や提案は、具体的にどのようにおこなわれていますか。

【高田】 廃油などの回収は、顔を見て、facetofaceでやります。1400世帯3200人

という小さな学区で、高齢化率も高く、地域の方々の様子がだいたいわかっていますし、町内会活動や各種団体の活動もそれなりに頑張っているところなので、わりあい「顔を見て」とか「いろいろな場所で」というのが多いですね。

たとえば月1回の廃油の回収のときに、「今度から蛍光管を集めるよ」とか「12月はクリーン大作戦があるから、大作戦には出なくていいけど、お家のまわりの落ち葉もよろしく」ということを、広報紙で知らせたり、口伝てに言ったりして、身近なところで伝え合うというかたちを採っています。

それと、「元町エコの日」のお知らせは、4月にラミネートにして地域の市の広報掲示板に1年中貼ります。また、年に3~4回はニュースも回覧板で回しますので、そういう手段での啓発もできます。あと、年に1回は「つどい」を開いて、全学区の方を対象に学習の場も設けます。

そういうなかでごみ減量の意識を高めたり、担い手というか、「ちょっと手伝ってあげよう」という人を増やしていくことが大事かなと思います。

【岩橋】自治会のごみ当番などは、負担に感じてやりたがらない人が増えているという話も聞きますが、元町学区の廃油回収やコミュニティ回収の当番を担当しているのは、どのような方々ですか。

【高田】5月に、「月に1回、2時間位、ちょっとボランティアしませんか」と回覧板で公募します。また、コミュニティ回収は当日「お知らせボード」の出し入れや目くばりがいるので、拠点の近くの方をお願いしたりもします。「月に2時間ぐらいなら」ということもあ

るし、「ちょっとだけ手伝って」というようなかたちでは、わりあい手を挙げていただけることが多いですね。

ただ、昼間の活動なので、お仕事をなさっている方はなかなか難しいのと、男の方を地域活動に引っぱりこむのは大変ですね。お役がつくとけっこうやってくくださるんだけど（笑）。だから他学区では、廃油の回収も、最初は女性会が…ということで、いまも女性会がされているところが多いですね。

こういうことは、結局は地域づくりになっていくので、いろいろな方が関わってくださることを大事にしています。その意味では、男の方の参加とか…。仕事をリタイアされた方は、時間的にも余裕があるんじゃないかと思うし、奥様のほうは、ご主人がいつも家にいられても困るから、「はいはい、うちのはすぐ出します」と言われるのですが（笑）。

女性は、どちらかといえば群れたり、誘い合って動きがちなので、「連なる」とか「つながる」というのがしやすいのですが、男性は本質的にあまりつながらないのでしょうか。何かの枠の中で個人として何らかのお役みたいをお願いすると、「そういうことならば」となるのですが、「ちょっとボランティアしませんか」というかたちは難しいですね。「じゃ、誘い合って、ちょっと参加しようか」とはならない。

ただ、切り口は「環境」や「福祉」などいろいろあっても、自分のくらしや地域のことを考えたりするのは、地域づくりだと思います。社協や自治連合会がしている事業についても、担い手というか、そういうことに興味や関心を抱いてくださる方をなるべく増やすことが大事。ごみを出していただくことも、そのための第一歩でないかと思います。

蛍光灯の回収も、最初は説明会を開いたり、いろいろな文書を作成して回覧したりしましたが、蛍光灯に水銀が含まれていることを知っているのは女性よりも男性のほうが多かったんです。だから、「蛍光灯に水銀が含まれているのはご存じですか。あれは有害で、今までみたいに『割って新聞紙に包んで出してください』というのはダメなんです。だから、地域でも集めることにしました」ということに関しては、非常に興味を持っていただいて、蛍光灯は男性が持ってきてくださることが多いです。

私たちとしては、何でもいいから興味を持っていただいて、それを行動に移してくださればいいので、そういうかたちで考えています。

【岩橋】 高齢者の方で、分別が難しい、ごみ出しが大変といった状況はありますか。

【高田】 高齢の方も多のですが、家庭ごみの回収については、「まごころ収集」といって、ごみ出しを行政がおこなうシステムもあります。それこそくらしのなかでの助け合いみたいなものがあるので、SOSを出される方に関しては、ご近所などで少し手助けをするようなこともあります。また、介護保険を利用されている方は、ヘルパーさんもいらっしゃるのです、その辺ですとか。ですから、よくそういう問題が言われますが、地域ではあまり問題になっていませんね。ただ意識はしています。

たとえばコミュニティ回収に出したいけれども、拠点回収まで持っていくのが大変という場合は、「言ってくれたら、もらいに行くよ」とか「隣の〇〇さんに言ってちょうだい」とか「ちょっと行ってあげて」と声かけをする。そういうつながりをつくるのも地域の役目ですから、「ごみだけ」と

というような感覚はないですね。

【岩橋】 ごみ出しのシステムというよりは、普段のくらしのなかでの行動なのですね。

ごみ減量化への取り組みと地域組織の活動

【岩橋】 コミュニティ回収もそうですが、京都市では地域組織の活動が重視されているように感じます。この点に関して、まず元町の地域的な特徴について、もう少し詳しくお聞きしたいと思います。この地域はあまり人の入れ替わりがないのでしょうか。

【高田】 元町は、小さな学区で、地下鉄北大路駅の北側に位置する、第1種住居専用地域なので、高層建築はほとんど建たず、北山通り沿いに2～3あるぐらいです。

賀茂川左岸の緑の多い落ち着いた住宅街で、75歳以上でも600人と高齢者は多いのですが若い人は少なく、現在、元町小学校は1学年1クラス全校102人と京都市でも2番目に生徒数が少ない小規模校なんです。親子三代ずっと元町って人も多く、あまり入れ替わりはありませんね。

【岩橋】 地域活動には若い世代も参加しているのでしょうか。

【高田】 元町の場合、年に1回、実行委員会形式で「元町まつり」をしていて、ことし11回目を迎えました。既存の各種団体だけではなくいろいろなグループと「この指とまれ」形式でやっています。毎年1～2グループ増えていますし、PTAや若い方が中心ですね。

だから、活動の切り口によっては若い方

が参加してくださるけれども、継続的にとても忙しい役目になると「ちょっとごめんなさい」という話で、敷居がすごく高くなります。でも、「この時期のこれだけやってくれたらいいから」とか「去年はあの方に頼んだのよね。お宅、ことしもお願いね」みたいな感じで、拡がるというのがありますね。そうはいつても、つながりのなかで見つけていく話なので、新しくひょいと来られた方が入りやすいかどうかはわかりませんが。

【岩橋】 元町まつりには様々な団体・組織が関わっていますが、ごみ減量やリサイクル等への取り組みはいかがでしょうか。

【高田】 ごみにしても、福祉にしても、結局、地域のコミュニティ活動として取り組んでいます。それは、いま私が社協の会長をしていて、ある意味、そこを利用して、やっている部分があるかもしれません。たとえば、「元町エコの日」のお知らせを広報掲示板に貼るのも、1団体では無理で、市の広報掲示板はある程度公のものだから、それこそ「自治連合会の許可を得てください」という話になりますが、「社協がやっている活動だから貼っても大丈夫」とか、元町会館の使用料も社協の建物だから「無料でいいです」という感じでやっています。町内会長も社協の役員だから協力していただきます。ごみ減量推進会議は、地域づくりにおけるごみや環境について発信するところという位置づけでやっているのだから、からみやすいというか、「こぢんまりしているわりには、いろいろやってるよね」みたいな話になると思いますが、実際はそれほどやっているわけではないんですね（笑）。他の活動と上手くリンクしてやっているの自分たちとしてはそんなにやっている感

覚はありません。

地域における生活協同組合の存在とは

【岩橋】 高田さんは、生協の理事を務められたこともあり、現在は京都市生活協同組合連合会の生協活動推進専門委員をされています。地域でごみを減らす取り組みのなかで、生活協同組合やその組合員の存在はあまり見えてこないような気がします。地域における生協の役割についてどのようにお考えでしょうか。また、高田さんから見て、生協の姿はどのように映っていますか。

【高田】 生協はここ何年か、事業も大変厳しいなかで、どうしても「売る」「お客さんである組合員に、とりあえず買ってもらう」ということが第1」というふうに見えます。「くらし云々」と言って、それなりにやってらっしゃるのでしょうが、それが見えない。そもそも生協が地域にどのように関わるつもりなのか、私にはわかりません。でもすごく惜しいと思うんです。その気になれば、生協で動けることはいくらでもあるのではないかと。生協で動くというか、生協の組合員を巻き込むようなかたちはとれるのではないと思うのですが…。地域でくらし、顔を合わせながら同じ場に立ってゆっくり丁寧にみんなの合意をとりながらすすめていくのが地域活動の基本なので、今のように2～3人の役員や職員だけが動く（ようにみえる）やり方は如何かと思います。生協の名のもとに地域で活動できる組合員の担い手が欲しいですね。

【岩橋】 高田さんが生協に関わり始めた当時は、まだ運営委員会が残っていて、さら

に校区単位の運営委員会もあったので、組合員自身も、地域住民であり、組合員活動の担い手として活動しているという意識があったのではと思いますが…。

【高田】 もう 25～26 年前のことですよ。意識していたかどうかはともかく、地域でいろいろな取り組みをしていました。たとえば食品の展示・試食会をして、みんなで食べながら「生協の商品をこんなふうにお料理したらどう?」とか、生協の「安心・安全」の話をしたり、お店の店頭で牛乳パックの回収やレジ袋の削減・有料化を呼びかけたりしました。今は社会の状況も変わってそういう活動スタイルがしんどくなり、組織も変わってきているので同じようにやるのは無理だと思いますが…。

私は今年、十数年ぶりに生協の総代に手を挙げました。「消費者市民社会」が提起され、「社会や環境に目配りができる自立した公正な消費者をつくろう」ということで、2012 年 12 月消費者教育推進法ができました。「買い物が社会を変える」って以前生協でも言っていましたし、この「消費者市民」って生協の目指す組合員そのものじゃないですか。それなのに生協からは、積極的な発言がない。それって、どうなの? やらないのはなぜだろう? という思いが強くて、総代に手を挙げました。

【岩橋】 ごみ問題への取り組みであろうと、地域での活動であろうと、組合員活動や購買事業を通じて、生協だからできることがまだまだあるのではと思います。ごみの減量・リサイクルを地域活動の視点から考えるとき、地域コミュニティの一員としての意識など、ごみの話にとどまらないことを強く感じました。今日は、ご自身の実践経験から、地域活動のあり方や生協への思い

をお話いただき、ありがとうございました。

【注】

- 1) 京都市ごみ減量推進会議は、市民・事業者・京都市が協力してごみの減量に取り組むために、1996 年 11 月に設立されたものである。2015 年 11 月 30 日現在、会員数は 481 となっている。このなかには、市民団体、消費者団体、環境団体、地域ごみ減量推進会議、マスメディア、学識経験者、大学、企業等が含まれている。(京都市ごみ減量推進会議 HP <http://kyoto-gomigen.jp/index.html> より。2015 年 12 月 6 日閲覧。)
- 2) コミュニティ回収とは、京都市が 2006 年から実施している制度で、古紙類や古着類、缶・びんなどの資源物の回収による、ごみの減量・リサイクルの取組を支援するために、地域の自主的な集団資源物回収への助成をおこなうものである。(詳しくは、京都市 HP「コミュニティ回収制度」<http://www.city.kyoto.lg.jp/kankyo/page/0000029098.html> を参照のこと。)
- 3) 2R とは、「リデュース Reduce (発生抑制)」、「リユース Reuse (再使用)」のこと。なお、これに「リサイクル Recycle」を加えた 3R もよく知られているが、「しまつのこころ条例」では、2R と分別・リサイクルの促進を 2 つの柱として掲げている。
- 4) エコまちステーションとは、地域における総合的な環境行政の拠点窓口として区役所・支所内に設置されているもの。
- 5) 京都市では、食材を使い切る「使いキリ」、食べ残しをしない「食べキリ」、ごみとして出す前に水を切る「水キリ」、これらの 3 つの「キリ」に取り組む「生ごみ 3 キリ運動」を推進している(京都市提供資料より)。